

## 一〇〇周年記念誌ができるまで

### 一、記念誌編集に向けて

本校では、毎年開校記念日には何らかの記念行事が生まれ、さらに十年毎の大きな節目には、学校の発展を願って盛大な記念行事や事業が行われてきた。

そして二十周年記念では『岐蘇林友』が、三十周年記念では『蘇門会報』が、それぞれ特集号を組み、そこには本校の歴史及び現状がまとめられ、さらに卒業生の寄稿と名簿が掲載された。

六十周年記念では『六十年の歩み』として、一二〇ページに及ぶ単行本一冊にまとめて刊行し、学校の還暦を祝った。その後も八十周年で写真を中心とした小冊子が作られたり、『学校だより』における特集が組まれた。

九十周年では『蘇門会報』などで特集が組まれてきた。

こうした中で一〇〇年という大きな節目を迎え、わが国で最初の林業を専門とする本校の一〇〇年史とでもいふべきものが欲しいとの要望が、学校内外から起った。

一〇〇周年記念事業実行委員会では、これらの要望を受け、事業の一環として『一〇〇周年記念誌』の編集を位置づけ、編集委員会を組織し準備に取りかかった。

### 二、編集委員会の発足と活動

平成九年（一九九七）二月、編集委員会が発足した。以来十回回の委員会を開催し、十一年に発足した編集小委員会は実に四十数回を数えた。その主な内容は次の通りである。

#### 1、編集の方針

次のような編集方針が決められ、それをもとに進められた。

① 一世紀に及ぶ本校の教育活動を再確認し、次の一〇〇年、二十一世紀における本校の存在意義と、その役割を切り開く内容とする。

即ち近代、現代における日本及び世界の森林・林業（その利用及びインテリア面を含む）や環境保全の歴史の中に、本校の存在を位置付け、かつその中に、今後の存在意義を見出だすものとする。

木曾という地域に根ざした学校として、地域との連携を明確にし、引き続き地域の学校として必要な学校であることを追究するものとする。

② 客観的かつ正確な事実を追究し、わかりやすく親しみやすい内容とする。

③ 本校に関する資料を整理し、次の一〇〇年に引き継ぐも

のとする。

## 2、資料収集とその整理・保管

### ①資料収集の呼びかけ

蘇門会員に、蘇門会総会及び支部総会において、チラシを配付して呼びかけた。地元木曾福島町においては、回覧板などで呼びかけた。こうした結果、貴重な写真や記録などを寄せる方々がいた。

さらに、戦中戦後の一番資料のない時代の卒業生たちが、集まって学校時代を語る会を開き、貴重な証言を得た。こうした方々のご協力は、本誌編集に大いに役立ち、感謝の意を表したい。この間「思い出の記」の原稿を募集し、延べ七〇名を越える方々から玉稿が寄せられた。これもまた貴重な証言である。

### ②資料の整理と保管

校内に残された資料の整理については、奥原修（50回）に依頼した。奥原は、膨大な資料を整理・分類してその目録を作成した。さらに整理された資料は、記念事業で建てられた「蘇水会館」（教育振興会館）内に保管し、次の一〇〇年に引き継ぐことになっている。

## 3、編集活動

記念誌構成をまず検討した。次にそれをもとに執筆分担をした。平成十一年一〇月、十二回目の編集委員会にて、ほぼ原稿の見通しがついたので、小委員八名を決め、小委員会にて原稿の整理・まとめを行った。

以来小委員会では、四十数回の編集会議を開き、原稿のチェック、補足、印刷原稿の校正などにあたった。

## 4、編集委員

編集委員長 古川彦次 (41回)

副々 今井弘幸 (43回)

### 編集委員

奥原万喜男 (27回) 中 勝幸 (82回) 白金 茂

小林和夫 (41回) 都筑 勝 (84回) 千村和彦

奥原 修 (50回) 尾羽林英樹 (89回) 柿崎庫之助

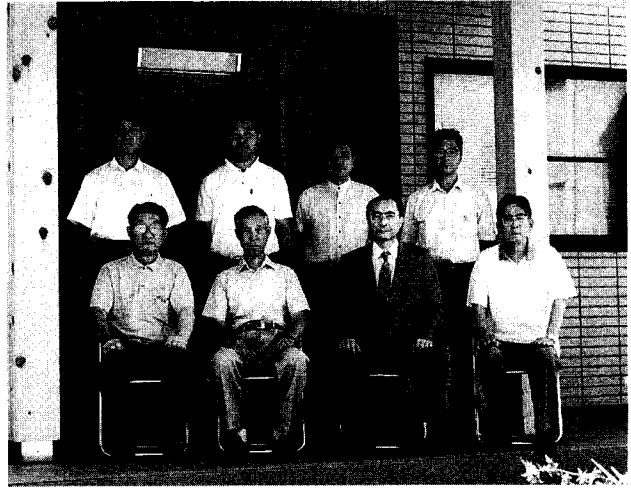
渡澤秀二郎 (51回) 野口牧子 (91回) 宮原達明

原 貞夫 (54回) 横沢 迪 (95回) 深井静夫

原 喜仁 (63回) 古畑伸一 (91回) 遠山善治

正澤好成 (70回) 海老沢健太 (96回) 宮下理人

手塚好幸



100周年記念誌編集小委員、蘇水会館前にて

(後列) 柿崎庫之助 遠山善治 原 喜仁 手塚好幸  
 (前列) 奥原 修 千村和彦 古川彦次 今井弘幸

## 5、執筆分担・係分担

### 第一部「二〇〇年の歩み」

序 章 手塚好幸

第一章 遠山善治、宮原達明、手塚好幸

第二章 手塚好幸、遠山善治

第三章 手塚好幸、遠山善治、奥原修

第四章 古川彦次、今井弘幸、奥原万喜男、遠山善治

小林和夫、手塚好幸

### 第五章

古川彦次、今井弘幸、千村和彦、奥原修、白金茂、  
 宮原達明、柿崎庫之助、小林和夫、渡沢秀二郎、

遠山善治、手塚好幸

### 第六章

古川彦次、柿崎庫之助、白金茂、原貞夫、奥原修、  
 原喜仁、小林和夫、遠山善治、手塚好幸、

宮下真理人

### 第七章

古川彦次、宮下理人、原貞夫、原喜仁、小林和夫、  
 遠山善治、柿崎庫之助、都筑勝、手塚好幸

### 第八章

手塚好幸、遠山善治、柿崎庫之助、宮下理人、  
 原喜仁、今井弘幸

### 部門・資料編

千村和彦、柿崎庫之助、原貞夫、正澤好成、

都筑勝、横沢迪、古畑伸一、遠山善治

署名原稿等は各記事参照

本誌の題字となった伊沢修二の書からの集字補正、各部など

の表紙の題字外すべての筆字 今井弘幸

### 第二部「思い出の記」

原稿整理、他 奥原修

パソコン入力

都筑勝、巾勝幸、尾羽林英樹、野口牧子、横沢迪、

古畑伸一、他

パソコン操作等

北原哲二、三澤五月、竹腰史佳

第三部「山林に学んだ仲間たち」

古川彦次、正澤好成、原貞夫、

渉外 正澤好成

会計 原貞夫

庶務 巾勝幸、海老沢健太、古畑伸一、他

三、ご協力いただいた方々

本誌編集に、ご指導・ご協力並びにお世話になった方々のご芳名をあげて感謝の意を表したい。(敬称略・順不同)

なお、現・旧職員の方々からも多大なご協力・ご指導を賜ったが、紙面の都合で、ここではご芳名を割愛させていただく。また卒業生についても、資料提供などについては、その都度述べてきたので、原則としてご協力いただきながら、お名前をお載せできなかった方のみ、次に記す。

ドイツ連邦共和国

Fachhochschule Eberswalde (エーベルスワルデ専門単科大学)

Prof. von. der Wense

Dr. rer. silv. Albrecht Milnik

R. Wudowenz Dipl. – Forsting

Technische Universität Dresden (ドレスデン総合工科大学)

Fakultät Forst.-Geo-und Hydrowissenschaften (森林・地理・水

科学部) Prodekan für Forstwissenschaften (森林科学科)

Prof. Dr. W. Kilisch

Prof. Dr. P. A. Schmidt

Prof. Dr. Heinz Rohle

Prof. Dr. E. U. Kopf

Dr. Klaus Lochmann

Dr. Erika Lochmann Dipl. – Forstingenieur

Ulrich Pietzarka Dipl. -Forstw. Kustos

C. Wenzel translator

アメリカ合衆国

Betsy Kate Mullins (木曾山林高校 AET)

大韓民国

羅天均、吳京錫、朴在烘、金碩中、金在烈、魏滉良、李忠浩

日本国内

嶺一三、小沢普照、筒井迪夫、阪上信次、箕輪光博、山縣光晶、

小松新平、林大九郎、長縄肇、村田雅威、原一雄、豊福緑、下川智、

明瀬文人、松田信子、大前勝利、松田裕鵬、手塚和平子、輪湖美津

子、園原繁・園原シズ、照屋昭和、安村武正、又吉康弘、岸本隆夫、

新里孝和、宮城政健、金城茂、尾関千恵、尾関隆、縣正昭、高林市

治、上條武、臼田明、広瀬啓子、堀部博子、遠藤鎮雄、伊原敏雄、

白井喜芳、宮下國弘、宮下美智代、杉山直、征矢東洋雄、唐澤直人、

糸崎典子、辻井斐子、高嶋弘志、下島宏、佐々木喜之、大蔵茂、横

野秀昭、原貞次郎、小沢彰一、千原勝美、山崎滋、青木収平、安原

勘吾、中村勇、古田和良、田中勝・田中そめ子、小林高夫、林久、

田中か祿、村上正光、丸山クニ、武井富喜雄、国政能明、山口和茂、

宮崎勇、片岡清和、下條忠計、山下忠作、安倍泰夫、小宮忠義、山

口通之、原卓也、日下部美代、山崎文麿、仙石鐵也、松田寿男、荻

山志喜子、芹沢正三、古畑平一、他多数

東京大学図書館・同農学部図書館、大日本山林会、駐日大韓民国大使館教育官室・韓国文化院、中部森林管理局、林野弘済会長野支部、木曽高校、蘇南高校、木曽福島町役場、井口喜源治記念館、沖縄県立北部農林高校、沖縄県国頭村役場、山口村役場、大同特殊製造株式会社、林野庁・同図書館、古田写真館、長野県教育委員会、長野県林業大学校、長野県林務部、上松町役場、アミーゴ菖蒲町生涯学習センター（本多静六記念室）、木祖村誌編纂室、清沢写真事務所、他

#### 四、主な参考文献（順不同）

ジャン・ジオノ作、寺岡襄訳『木を植えた男』あすなる書房  
1997年

矢島文夫訳『ギルガメシュ叙事詩』山本書店 1984年

ジャック・ウエストビー著、熊崎実訳『森と人間の歴史』築地書館  
1995年

コンラッド・タットマン著、熊崎実訳『日本人はどのように森をつくってきたのか』築地書館 1998年

カール・ハーゼル著、山縣光晶編訳『森が語るドイツの歴史』

築地書館 1996年

大貫良夫・他著『人類の起源と古代オリエント』世界の歴史1

中央口論社 1998年

湯浅赴男著『環境と文明』新評論 1996年

安田喜憲著『森を守る文明・支配する文明』PHP新書

1997年

エルベール・トマ著、河合雅雄監修、南條郁子訳『人類の起源』

創元社 1995年

E・アイザック著、山本正三・他訳『栽培植物と家畜の起源』

大明堂 1985年

『朝日百科世界の歴史1・紀元前の世界』朝日新聞社

筒井迪夫著『森林文化への道』朝日選書 1995年

片山茂樹『ドイツ林学者伝』財団法人林業経済研究社 1968年

三浦伊八郎著『欧米に於ける林学教育』東京帝国大学農学部付属

演習林 1927年

『エーベルスワルデにおける林学教育と研究の歴史』エーベルスワ

ルデ専門単科大学 1993年

(Geschichte der forstlichen Lehre und Forschung in Eber-  
swalde)

A・ミルニック著『バーンハード・タンケルマン』

(ALBRECHT MILNIK: Bernhard Danckelmann. 1999 nimrod-  
verlag)

寺尾辰之助編輯『明治林業逸史』大日本山林会 1931年

寺尾辰之助編輯『明治林業逸史続編』大日本山林会 1931年

日本林業技術協会編『林業先人伝』日本林業技術協会 1962年

手束平三郎著『森のきた道』日本林業技術協会 1989年

林野弘済会長野支部編集・監修解説所三男『木曾式伐木運材図会』

林野弘済会長野支部 1975年

本多静六著『明治二十三年洋行日誌』本多静六博士を記念する会

1999年 阪上信次氏提供

小林富士雄著『ターラントとH・コッタ』（随想『森林』土井林学

## あとがき

平成九年二月、第一回編集委員会が結成されて以来、五年の歳月が過ぎた。この間、編集委員会を十二回、小委員会は実に四〇回を越えた。特に昨年夏以来この一年間は、ほぼ毎週一回のペースで進められた。

しかし進み方は誠に遅々たるものであった。それは一〇〇年のあまりに長いこと、そして山霊に育まれた「木曾山林学校」・「高校」が、実に大きく深いことであった。やればやるほどそれが勝っていくのを覚えた。まさに群盲象を撫ず、であり、七五〇余ページには到底収まらない本校教育の営みの豊かさと同英傑の多さに気がついた。そして、その度に筆舌尽くしがたい歴史群像の前に立ちすくんだ。

執筆、編集作業は、実にこうした極めて困難な作業であったが、幸い毎回報告される新たな事実が驚嘆し、勇気づけられた。再び委員一同せてその一端なりとも記さねば、との思いで筆をとった。

さらに私どもを勇気づけたのは、数多くの方々のご協力とご声援である。

偶然本校職員だとわかると、進んで学帽を被った夫の遺影を探し出してお貸し下さった林ひささん、彼女の夫は第二回卒業生の林与五郎であった。一〇〇歳近い老婆の心には、夫の母校

山林学校が今も生き続けていた。

たった一通の依頼状をもとに、巡礼者のごとく歩き回って原四郎公永世不立碑を探しまわって下さった韓国の方々。古い文献の中から日本人の記録を一つ一つ丁寧に探し出し、さらにそれらに逐一英語訳をつけて下さったドイツの方々。

さらに蘇門会員の皆様はじめ、学内外の実に多くの方々から献身的なご協力を賜った。誠に感謝の気持ちでいっぱいである。本来ならば、ここでお言葉をいただいた林野庁長官加藤鐵夫氏はじめお一人ずつお礼の言葉を申し上げるべきであるが、紙面の都合で割愛することをお許しいただきたい。

このように絶大なご協力を賜りながら、本誌がそのご期待に充分添うものかどうか、大きな不安を覚える。

否、深くお詫び申し上げなければならないことがある。

それは、本誌が本年六月完成の予定であったのが、大幅に遅れてしまったことである。さらに当初予定した構成を途中で一部変更したため、資料収集でご協力をいただきながら、充分その資料をいかせなかつたり、中には使用できなかった資料もあることである。重ねて深く詫び申し上げる。

最後になってしまったが、電算印刷・企画開発参事の齋藤治男氏、同編集担当小倉好美氏には、この間誠意をもって本誌の刊行にご尽力いただいた。厚くお礼申し上げます。

重ねて本誌刊行にご協力賜ったすべての方々に、衷心より感謝申し上げます。  
(編集委員会事務局) 手塚好幸

『山靈生英傑』木曾山林高校創立一〇〇周年記念誌

発行年月日 平成十三年（二〇〇二）一〇月六日

編集 長野県木曾山林高等学校  
創立一〇〇周年記念誌編集委員会

発行 長野県木曾山林高等学校  
創立一〇〇周年記念事業実行委員会

長野県木曾郡木曾福島町新開四三三六  
電話 〇二六四（二二）二〇〇七

印刷 電算印刷株式会社

長野県松本市筑摩一十一一三〇  
電話 〇二六三（二五）四三二九代

